変災序記

田中貢太郎

大正十二年九月一日の朝は、数日来の驟雨模様の空が暴風雨の空に変って、魔鳥の翅（はね）のような奇怪な容（かたち）をした雲が飛んでいたが、すぐ雨になって私の住んでいる茗荷谷（みょうがだに）の谷間を掻き消そうとでもするように降って来た。私は平生のように起きて、子供たちと一緒に朝飯を喫（く）い、それから二階へあがって机に向ったが、前夜の宿酔のために仕事をする気になれないので、籐（とう）の寝椅子によっかかりながら、ガラス越しに裏崖の草藪の方を見た。漆の木、淡竹、虎杖（いたどり）、姫日向葵（ひまわり）の葉、そうした木草の枝葉が強い風に掻きまわされ、白い縄のような雨水に洗われて物凄かった。

その日はいわゆる二百十日の前日であった。室の中には南風気（みなみげ）の生温い熱気が籠って気味が悪かった。私はもう戸外を見るのも厭になったので、そのまま眼を閉じて前夜の酒の席のことなどを考えていた。馬場孤蝶翁が銀婚式をやる年に当り、初孫も生れ、それで全集も出ることになったので、門下知友がその祝いをやるとともに、記念文集の出版の挙となり、私もその委員の一人に選まれたので、その日五六人の委員と孤蝶翁の家に集まって、文壇の各方面に原稿の寄稿依頼の手簡を出したが、終って夕飯を喫うことになり、江戸川端の「橋本」という鰻屋に往ったところで、若い鼻

眼鏡の委員の一人が興に乗って、ビールのカップや猪口に歯を当てて噛み砕いて酒をあおった。私はその友人の紅い唇などを思い浮べて独りで笑い心地になっていたが、急に四辺がひっそりとなったので、不思議に思って眼を開けた。うす暗かった家の内が明るくなって、草藪の上に陽の光が射していた。私は起きあがって表に向いた方の雨戸を開けた。

磨きをかけたような藍色の空にうす鼠色の雲が動いていて、暑い陽の光が風に吹きちぎられたようにぎらぎらと漂っていた。私の家の玄関口からは二三十間も前になった街路に面した総門越しに眼をやると、街路

の向う側の藤寺の墓地の樹木が微風に揉まれていた。その樹木の中には欅があり、向う隣の二階家の屋根の上に見える一本の白楊は、葛の葉のような白い裏葉を見せていた。その二階家の向うは総門の左側の角になって、木造の青ペンキ塗りの古いシナ人の下宿があった。墓地の樹木は崖の上の樹木に続いて、その間に一軒の高い窓の家は下宿屋であった。下宿屋の上の家並は大塚の電車通りに沿うた人家で、総門の右側には雑貨店をやっている小学校の校長の住んでいる二階家があって、その向うには墓地の続きになった所に建った大きな建物の簷（のき）が僅かに見えていた。それは奈

良県の寄宿舎であった。寄宿舎の右寄りの上にも二軒の二階家が涼しそうな顔を見せていた。

それはもう十一時を過ぎていた。私は胃の勢いであろう物が喫いたくなったので、早い昼飯をこしらえさしてそれを喫い、裏崖に向った窓の下に据えた机の前に往って、泉筆を持って書きさしの原稿紙に三四字書いたところで、家内があがって来て来客を知らした。

「ワチっていう方が見えました」

私はすぐ大町桂月翁の許に寄宿していたことのある和智君ではないかと思った。で、家内に言いつけてあげてみると、果してその和智君であった。和智君は痩

せて背のひょろ長い体に洗い晒した浴衣を着ていた。私は和智君とは一度しか逢ったことはなかった。それはもう六七年前のことであったが、眼玉の出た神経的な特異な眼に記憶があった。和智君はエヤーシップの袋を出して火を点けた。

「大町先生の門口まで往ったが、ひっ返して来ました」

和智君は東京から帰って朝鮮あたりで新聞記者をしていたと言った。

「アメリカへ往くつもりで、渡行免状をもらったところで、親爺が病気になったものですから、よしたのです」

と、和智君が言いかけたところで、どう、どう、という風の音とも遠雷とも判らない物の音がして、その音が地の底に響いたように感じた刹那、家がぐらぐらと揺れだした。ちょうど大波の上に乗った小舟のように揺れて、畳がむくむくと持ちあがりそうになった。がらがらばらばらと物の崩れるような音や倒れるような音が、周章(あわ)てた私の耳に入った。

「地震だ」

私と和智君ははね飛ばされたように起ちあがった。私は畳の上を二足ばかりひょろひょろと歩いた。

「おい、地震だ、地震だ」

下から女の児の泣き声と家内の叫ぶ声とが同時に聞えて来た。私はふと家内と子供を二階へ伴れて来ようと思った。それは安政の地震をはじめ地震のことを研究している人から、二階にいれば比較的安全だということを聞かされているためであった。私は和智君が倒れかけた襖の傍を裏崖へ向いた窓の方へ往く姿をちらと見たばかりで下へ駆けおりた。

「二階、二階、二階へあがれ」

家内は一枚障子のはずれた玄関の柱の傍につくばって、左の手をその柱にかけ、右の手で泣き叫ぶ四つになる末の女の児を抱きかかかえるようにしていた。八つ

になる女の児はその後で持ちあがる畳を押えつけようとでもしているようにしてこれも泣いていた。私はいきなり家内の抱きかかえるようにしている末の児に手をかけた。

「大丈夫、大丈夫、二階へあがろう、二階へあがろう」

私に力をつけられて家内は起きあがった。家はゆらゆらとして足許が定まらなかった。私は末の児の胴から上を持ち、家内はその下を持って、姉の児を衝き飛ばすようにして先に立てて二階へあがった。

「大丈夫、大丈夫」

家内は倒れかけた襖に摑まろうとして、ひょろひょ

ろと歩いた。二軒長屋になった隣との境の壁がぬき板に沿うてひびわれるのが見えた。私は末の児を抱きかかえたなりに、はらはらとして立っていた。

戸外の方では物の倒れる音、瓦の落ちて砕ける音、その音の間に泣き叫ぶたくさんの人声が波の打つように聞えた。

「和智君はどうしたろう」

和智君の姿はもう見えなかった。私が和智君のことに気がついた時には、もう地震は小さくなっていた。

「やんだ、やんだ、この隙に戸外へ出よう」

私は末の児を抱き、家内は姉の児の手を曳いて、そ

そくさと下へとおりた。地の震いはひどく小さくなっていた。家内は土間へおりて姉の児に下駄を履かしたので、私は手にしていた末の児をその背に乗せた。

家内はそのまま出て往った。私は瓦が落ちやしないかと思って出て往く一行の後を見送りながら、土間へおりて下駄を履き、追っかけるように玄関口へと出た。家内は総門の左になったシナ人の下宿が門の内へ倒れかかっている下を通って街路へ出、街路の向う側、藤寺の墓地の垣に添うて立っている五六人の者と一緒になった。私はやや心に余裕が出来た。私は校長の家へと眼をやった。校長の家の屋根は瓦がたくさん剝げ落

ちていた。私の眼は今度は右の方へと往った。そこには家主の赤い煉瓦塀があって此方との境をしており、その上に一本の煙突があって平生店子(たなこ)を督視しているように立っているが、どうしたことかそれが見えない。私は不思議に思って気をつけて見た。煙突は向う隣の素人下宿屋の台所の屋根に倒れ落ちて、その屋根をめりこましていた。煉瓦塀は砕けて路次の行詰を埋めていた。私はいきなり向う隣の非常口の木戸の戸を開けた。

「有馬さん、有馬さん、大丈夫ですか」

と、間をおいて病身な主人の声が台所の方でした。

「た、あ、な、か、さん、で、す、かア」
主人は台所に這いつくばって、起きようともがいているところであった。
「けがはなかったのですか」
「けエがアは、ありイませんが……」
主人はのっそりと起きて来た。
「えらいことでしたね、けががなかったなら好いのですね、でも、まだ危険ですから、外へ出ようじゃありませんか」
私はそのまま走って外へ出た。かなり強い地震がまたやって来て地の上がゆらゆらゆらとした。私は墓地の生

垣に体をぴったりと押しつけるようにして、シナ人の下宿を気にしている家内の傍へ往った。その生垣の根方には黒い煉瓦を築いてあったが、それが皆崩れて垣の根があらわれていた。

「ここなら大丈夫だ」

「でも、こわいわ、こわいわ、どうしましょう」

シナ人の下宿の並びの米屋と差配などの住んでいた一棟は潰れていた。私たちの頭の上には電燈の太い蛇のような線が通っていて、門口の右手よりにその柱があった。私は下宿の方よりもその方が怖かった。シナ人の下宿の軒先にも電信線があった。その下宿の簷（のき）は

ぐらぐらとしてその柱に当りそうに動いていた。

「さっきのお客さんですよ」

家内の声がするのでふと見ると、家内の右側に和智君が黒い顔をして生垣に寄りかかっていた。

「お客さん、足をけがしていらっしゃいますよ」

和智君は私が家内と子供を下へ伴れに往っている間に、二階の簷から飛びおりて右の足首をくじいていた。

「そいつはいかん、僕がもんであげよう」

私は和智君を崩れた煉瓦の上へかけさして、くじいた足首のあたりを揉んだ。和智君は痛いと言って長くそれを揉まさなかった。

「ここは駄目ですよ、どこかへまいりましょう」
家内が私に言いかけた時、また地が震うて来た。三四人の者は奈良県の寄宿舎の下の高い崖の方へと往きかけた。寄宿舎の庭なら安全であると私は思った。私は和智君を後で迎いに往くことにして、まず、子供と家内を伴れて往った。その僅かな路の間も電線に注意したり、右側の簷の瓦に注意したりした。
寄宿舎の庭にはもう付近の者が二三十人も来ていた。寄宿舎の屋根の上に見えていた二軒の家は崖が崩れたために、その一方の家は簷が落ちて、それが寄宿舎の庭へ落ち重なり、その下に建っていた小使室を潰して

いた。私は家内や子供をそこへ置くなり、和智君を迎えに往っておぶって来た。

寄宿舎の庭には、腰かけや玄関のあがり口に敷いてあったらしい台を出してあった。私は家内や子供たちの立っている傍の台に和智君をかけさし、家へ帰って畳表の古いのでこしらえてある筵を取って来て敷いた。地は脈を打つように後から後からと動いて来た。

和智君はその筵の上に蚕のようになって寝た。私は何かしらその地震よりも大きな危険が来て自分の後に迫っているような気がして、そこにじっとしていられないので、シナ人の下宿の前へと往った。三四人の者

が口口に何か叫びながら潰れた家の取付きの所で騒いでいた。何事であろうかと思ってその傍へ寄って往った。

「どうしたのです」

「二人敷かれてますよ」

知合いの八百屋の豊というのがそう言って、潰れた家に圧されて歪(ゆが)んだシナ人の下宿の入口から入って往こうとしたが、扉が締っていて入れないので、皆で瓦を掻き除けて屋根を破ることにした。私もそれに手を貸して瓦を剥いだ。地震に逃げ迷うている人びとがその傍を狂気のようにして往来した。

「火事だ」

大砲を打つような響きが続けさまに起った。二人の男は潰れた家の屋根の上にあがって、柱の折れたので内の方をまぜるようにしていた。

「大丈夫だよ、大丈夫だよ」

その時地の底からでも聞えて来るように女の泣き声が聞えて来た。

「もうすぐだよ、すぐだよ、心配しないが好いよ」

めりめりと屋根の破れる音がするかと思うと、一人の男がしゃがんで柱の折れを入れた所へ手をやった。

「よし、来た、それ、よいしょ」

髪の乱れた色の青い女が曳き出された。女はひいひい泣いていた。女は出されるなり骨のないようによろよろとなった。私はあがって往ってその女を肩にかけた。女は苧殻（おがら）のように軽かった。私はその女を墓地の垣根の下へ伴れて往って、煉瓦に腰をかけさせた。

「もう大丈夫だ」

顔の土色をした頬髭の生えた病人が女の後から簷をおりて来た。それは女の夫らしかった。私はそれから藤寺の門前になった藤坂の方へと往った。坂のあがり口の冬は「おでん屋」になる氷屋の一家は、寺の門の内の藤棚の下へ避難していた。そこに太った氷屋の老

婆がおどおどして立っていた。
「お婆さん、けがはなかったのですか」
背の高いそこの女も不安な顔をして立っていた。
「先生、火事だというじゃありませんか」
神田方面が火事になったとその女が言った。私は寺の門を離れて坂の上へと往った。広い電車通りには街の両側の人びとが溢れ出て、線路の上に避難していた。電車はそこここに投げ出されたようになっていた。両側の家家の屋根瓦は剝げ落ちて、瓦の下に敷いたソギが現れていた。私は俳友の鈴木寿月君のことが気になったので、右の方へと曲って往った。寿月君の宅は

すぐ通路の左側のパン屋の横になった路次の奥にあった。私は人びとの避難している線路を横切って路次の方へ往こうとしたが、どうもやはり線路の上に避難しているらしいので、路次の入口になった線路の所に眼をやった。小柄な寿月君の細君が、線路の上に敷いた筵の上に坐って洋傘をさし、嬰児を膝にしていた。

「や、奥さんですか、大変なことでしたね、けがはなかったのですか」

「私たちはなんともなかったのですが、やどが横須賀へ往ってるものですから、それを心配してるのですよ」

砲兵工廠に勤めている寿月君は、暑中休暇を利用し

て横須賀へ遊びに往っているところであった。
「横須賀は、そんなことはないでしょう、大丈夫ですよ」
私はそんな気休めを言って引き返したが、その実心配でたまらなかった。私はそれから坂の左側になった小さな洋食屋の前へと往った。私はその前の線路の上にも、椅子に腰をかけた五六人の人びとを見出した。
「お宅はなんともありませんでしたか、たいへんなことになりました」
むすめむすめした商売屋のお神さんらしくない洋食屋のお神さんが、涙ぐましい声で挨拶した。その神さ

んの傍に鼻の黒子（ほくろ）の眼につく可愛い女が、人なつこい顔をしていた。

「どうだね、びっくりしたかね」

私は坂をおりて寄宿舎の庭へ帰ろうとしたが、煙草が飲みたくなったので、校長の店によって敷島を五袋もらい、ついでに夜の燈火のことを思い出して十本の蠟燭ももらって出た。

「えらい地震がしましたね」

牛込新小川町の下宿にいる若い友人が、心配して見に来てくれたところであった。私はその友人を伴れて寄宿舎の庭へと往った。

「神田方面はひどい火事ですね、砲兵工廠も燃えていますよ」

寄宿舎の門からすぐ近くになった切支丹坂（キリシタンざか）の方の空には、白い牛乳色をした入道雲のような雲が二つ盛りあがっていて、その下になった方が煙り立っていた。それは陽の反射によって火事の煙が二様に見えているのであった。

寄宿舎の庭では和智君が帰りたがっていた。私は切支丹坂下の乗りつけの車屋へ往ったが、曳子がいないので、後から来るように言っておいて帰って来た。寄宿舎の上の簷の崩れた家の主人であろう、一人の男が

寄宿舎の横の谷間のような所から這いあがって往って、崩れた崖へかかっている家具の間を彼方此方（あちこち）していたが、見ている内に軸物のような物を二つばかり拾った。地震が来るとこわれかかった家の簷がぐらぐらと動いて今にも落ちて来そうに見えたが、その男はやめなかった。

「熱海の魚見岬で、子供が草履を落したので、それが惜しくて、岩の上から覗いていて、すべり落ちて死んだお母さんがあったよ、今にあの男も死ぬるから見給え」

私は若い友達を伴れて再び藤坂をあがって伝通院の

方へと歩いた。それは砲兵工廠の火を見るためであった。線路の上に捨てられた電車は、そのまま付近の人びとの避難所になっていた。街路の左右には避難者の人浪が打っていた。

街路のゆくてには煙が空を焦がして陽の光が黄いろくなっていた。伝通院はすぐであった。その向うには砲兵工廠の一つの建物に赤い火の這いかかっているのが見られた。大砲を打つような音が時どきした。私たちは伝通院前から右に折れた電車の線路になった坂をおりた。その広い安藤坂の中央の左側にある区役所の建物の下手になった人家の簷には、蛇の舌のような火

が一面にあがっていた。私たちは坂を降りて江戸川縁（べり）を船河原橋の方へと往った。片側町の家の後はもう焼け落ちて、その火は後の砲兵工廠の火に続いていた。

私たちはそれから飯田橋を渡って甲武線の線路の上に出た。九段から神田方面にかけて一面の火の海で、中でも偕行社らしい大きな建物に火のかかっている容は悲壮の極であった。黄いろな陽の光を掠（かす）めて業風（ごうふう）のような風が吹いて、それが焔を八方に飛ばし、それが地震で瓦を落した跡の簷のソギをばらばらと吹き飛ばしていた。振り返って砲兵工廠の方を見ると、一段と色の濃い火の中に青や赤の色の気味悪い火を交えて見

えた。火薬の爆発するらしい音もそれに交って聞えた。私はそれから東五軒町へ往って服部耕石翁を見舞い、それから若い友達と別れて寄宿舎の庭へ帰った。そして夕方になって、やっと［＃「やっと」は底本では「やっと」］車を得て和智君を帰した。

私たちはそこで家内が持ち出して来た飯櫃（めしびつ）の飯を喫（く）って、不安な夕飯をすまし、筵二枚並べて敷いた上に蒲団を敷いて横になった。その私たちの傍には太田という漢学者の一家が避難していた。蠟燭の灯が其処此処に燃えた。

夕暮の東北の空は真赤に焼け爛（ただ）れて見えた。そして

一睡して眼を開けると、うす赤い月が出ていた。
地は時どき揺れた。

底本：「貢太郎見聞録」中公文庫、中央公論社
１９８２（昭和57）年６月10日発行
底本の親本：「貢太郎見聞録」大阪毎日新聞社・東京日日新聞社
１９２６（大正15年）12月
入力：鈴木厚司
校正：多羅尾伴内
２００３年８月27日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、

校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。